

国際理解教育の深化とその学習指導の在り方

—東南アジアにおける魚醫油文化を事例として—

平成4年度千葉県長期研修生

(現在：市原市立白金小学校教諭) 表谷 幸雄

I. 研究主題について

日本は明治以来、欧米文化の摂取に努め、今日では、アジアで唯一の先進国となった。しかし、その裏では、自国の繁栄を求めるあまり、周辺のアジア諸国を犠牲にしてきた経緯がある。つまり、日本の経済繁栄がアジア諸国を経済的な停滞・貧困状態に押し留め、さらにこの状態を反映してか、暗黙のうちに、アジアを低く位置づけようとする認識をも生みだした。この大人の認識は、児童にも大きな影響を及ぼし、たとえば、後述の小学6年生を対象にした東南アジアについての意識調査からも明らかなように、児童のアジアに対するイメージにも偏りがみられる。このような児童の態度は、もちろん、知識不足や外国理解の未熟さなどに起因するものと思われるが、児童たちのあいだにも偏見をもってアジアを見るふしがかがえる。

これに対して、最近、日本とアジアの関係を表すときに、「日本はアジアの一員」という言葉がしばしば使われている。この表現からは、これまでアジアを低く位置づけてきた従来の姿勢を省みて、アジアと協調しようとする姿勢が読み取れる。このような最近の傾向を受けて、本稿では、児童のアジア認識を変えるべく、児童の興味・関心の高い「食べ物、住居、自然、生活様式」などに着目して、東南アジアを考察し、児童の自国中心に物事を考える傾向をやわらげ、人間理解をめざす視点の改善に心がけることを第一の目標としている。

ところで、日本を含めた東アジアの文化は、孤立して形成されたものではなく、様々な民族との交流の上に成立したものである。そして、さらに巨視的にみれば、東アジアの食をめぐる文化圏は、隣接する東南アジアと一体のものである。日本の伝統的な食文化の中にも、東南アジアと同じものを食しているという事実が存在している。こうした事実を掘り下げ、着目していく過程で、児童たちに文化の

共通性を気付かせ、同時に、人々の知恵に共感させることができるように思われる。

また、食文化における異文化理解の指導の場に「必然性の視点」を設定すれば、児童たちのアジア理解は容易になり、その認識も深まるであろう。たとえば、本稿での具体的な対象である魚醤油を通して東南アジアの気候を知り、暑さを知り、暑さゆえの「食の保存の必然性」を東南アジアの食文化に認めるであろう。その認識をもとに児童たちの関心を自国の食文化にも向けさせ、その比較を通して人間には、同じ知恵や願いがあることを児童たちに気づかせることにより、東南アジアの人々への心の窓を大きく開くものと考え、本主題を設定した。

II. 研究の目標

1. 児童がアジアに対してもっている意識の偏りを明らかにし、アジアを正しく認識させるための資料提示、学習活動のあり方を究明する。
2. 東南アジアの食文化の中から、児童の実体験と関連の深いものを教材化し、人間理解を深めるための必要条件を明らかにする。

III. 研究の仮説

1. タイの食生活に密接にかかわる魚醤油を学習の中心に取り上げることにより、児童はタイの食生活に対して関心と共感を持つであろう。
2. 魚醤油が気候や産業と深く関わっていることを知ることで、児童は文化の生まれることの必然性に気づき、タイの人々の生き方を認めるであろう。

IV. 研究の内容と方法

1. 主題に関する基礎研究
 - (1) 異文化学習で食文化を取り上げる必要性
 - (2) 異文化学習における感情移入の必要性
 - (3) 異文化理解の過程
 - (4) 魚醤油の教材化

2. 実践研究

(1) 検証授業の概要

(2) 検証授業の結果と考察

V. 研究の概要

1. 主題に関する基礎研究

(1) 異文化学習で食文化を取り上げる必要性

まず、児童のアジアに対する偏りについての問題点を明示するべく、千葉市内の小学校3校、市原市内の小学校7校の合計 457名を対象に意識調査を実施した。回答は、自由記述による質問紙法でおこなった。その結果が表1である。

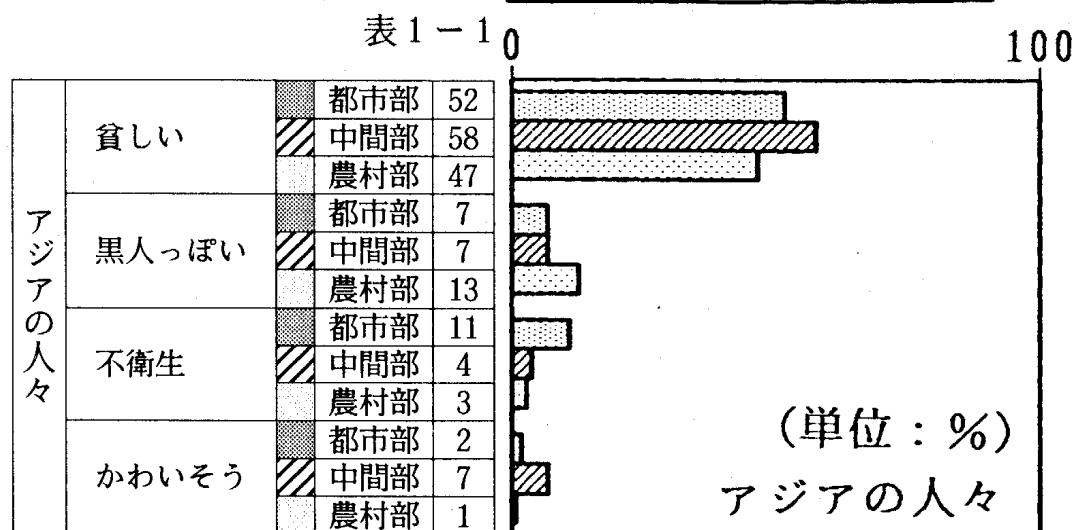
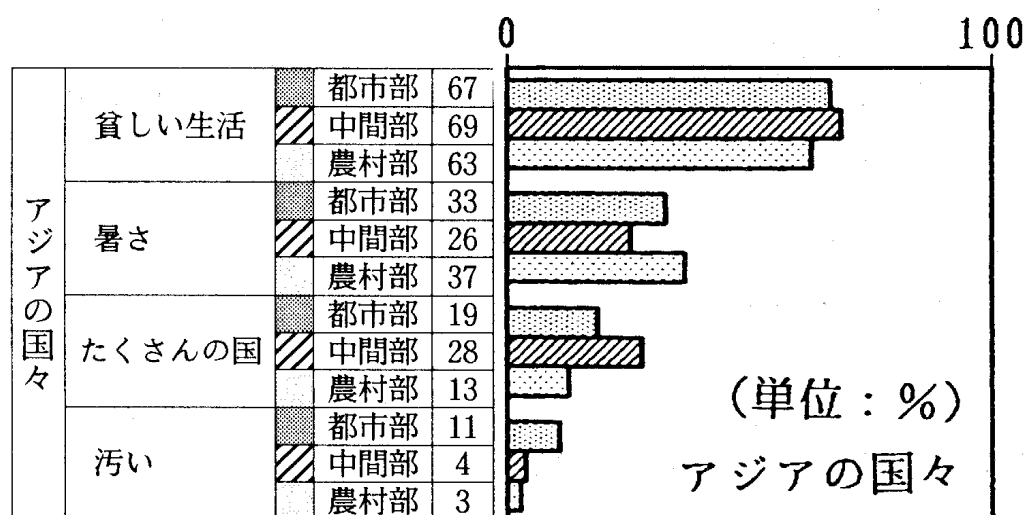


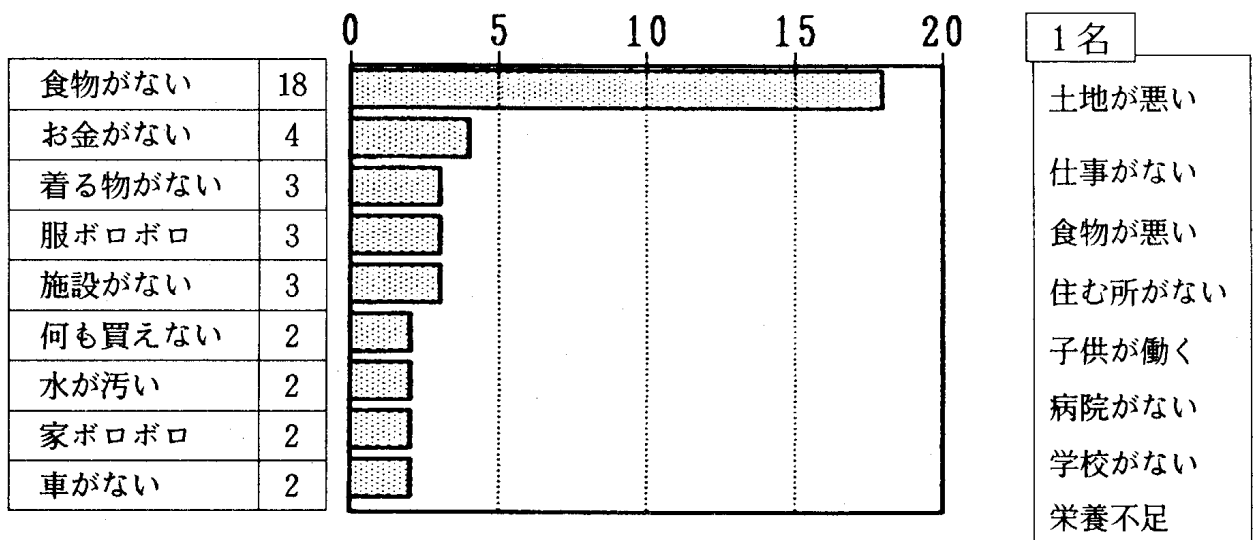
表 1-2

この表1からわかることは、都市部、中間部、そして、農村部の多くの児童がアジアに対するイメージとして「貧しさ」を挙げている点である。これは、負の

イメージといってよいであろう。また、アジアの人々の生活に関するイメージについても、「汚い」「不衛生」「食べ物が少ない」「病気の人」といった内容が挙げられている。

ところで、上記の「貧しさ」という負のイメージを具体的に知ること、異文化理解教育の方向性を見い出せるものと考え、検証授業の学級（6年生、30名）を対象に自由記述で調査を実施した。その結果をまとめたものが、表2である。

設問 — 貧しさとは？ （単位：人）



この表2からわかるように、児童たちの負のイメージは、衣・食・住の多方面にわたっている。その中でも特に、「食べ物が少ない」という「食」に集中しているのが特徴である。飽食といわれる時代に育った児童には、マスメディアが好んで取り上げるアジアの人々の質素な食生活は、日本での豊かな食生活との比較で「貧しい」という負のイメージを抱いてしまうのであろう。この場合の問題点は、二つある。まずひとつは、マスメディアによるアジアの取り上げ方であり、ふたつめは、児童に情報を正しく判断する基準がない点である。そのために、マスメディアが提供する事実を唯一のものと受け取り、その誤解に基づいて、アジアについての負のイメージがつけられてしまうのであろう。

(2) 異文化学習における感情移入の必要性

児童のアジア認識は一面的なものでしかない。なぜならば、アジアにふれる機会は少なく、得られる情報源は、その大半をTVが占め、しかも、TVは断片的、一面的な情報しか供していないからである。その情報も卑俗的なもので

あり、国際相互理解にとって、マイナスに作用している。一方的な情報と偏りは、児童のアジアへの印象や見方を固定化しつつあるのが現状といえよう。

このような現状の中で、児童に、異文化を学習させるためには、「感情移入」という視点が考えられる。そして、その効果は、大いに期待できる。

以下、その理由を述べることにする。

ディメンの説によれば、異文化学習の過程は、5段階になり、最後に到達する段階で異文化の人達の感情や知恵を知的に理解するだけでなく、それらを体験として共有できるとし、感情移入の期待度を高くしている。

		段階	内 容
文化・社会的な距離	最大	1	文化的相違をほとんど意識しない
		2	表面上の異国的特徴を意識する
		3	文化相違点を一層意識する
		4	重要な文化的類似点と相違点を意識する
	最小	5	相手の立場から感情移入をする

では、なぜ、感情移入が必要なのであろうか。ディメンの説をもとにすると、次のように考えられ、学習に深まりを持たせられるという点から、感情移入の必要性が生じてくる。

- ア. 他国の文化を理解するだけでなく、文化そのものの意味あいが考えられる。
- イ. 感情移入は、人を介して可能であり、そのため、人間理解を推し進められる。
- ウ. 同じ人間としてもっている普遍的な生き方、考え方に具体的に気づくことが可能である。

(3) 異文化理解の過程

ディメンの「感情移入」は、「共感」ともみてとれる。それは、非常にメンタルな部分であり、最終段階に到達するまでの指導過程のあり方が大きく関与する。児童の意識をより深化させるためには、学習する文化にどれだけ着目させ、思考

させるかが肝要と考え、本稿では、「必然性」という視点を設定した。

必然性の視点を中心にした異文化理解教育

すべての事象に「必然性」を当てはめれば、人間にとって本来、何が大切かを考える児童に育つだろう。

追い求めるところの「共感」成立のためには、「必然性」が、不可欠ではないだろうか。

① 文化をとらえる視点として

ア. 必然性を価値判断の柱とすれば、文化の多様性に深い意義を見だし、多様性を認めるだろう。

イ. 必然性を価値判断の柱とすれば、相手の立場に立ち、寛容の心を持って接しられる児童に育つだろう。

必然性を価値判断の柱とすれば、文化形成の意味・背景を考え、その国の人々の生き方、考え方を理解しようとする児童に育つだろう。

必然性により、感情移入がより確実なものになるのではないか。

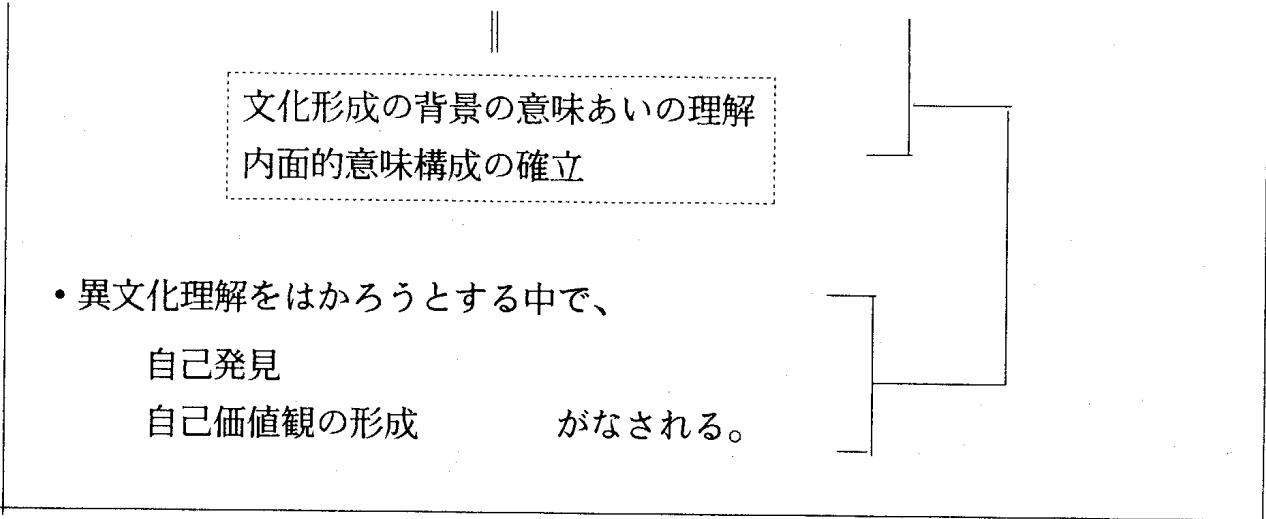
② 異文化理解の過程との関連

ア. 文化は、すべて意味のあるものとしてとらえると、

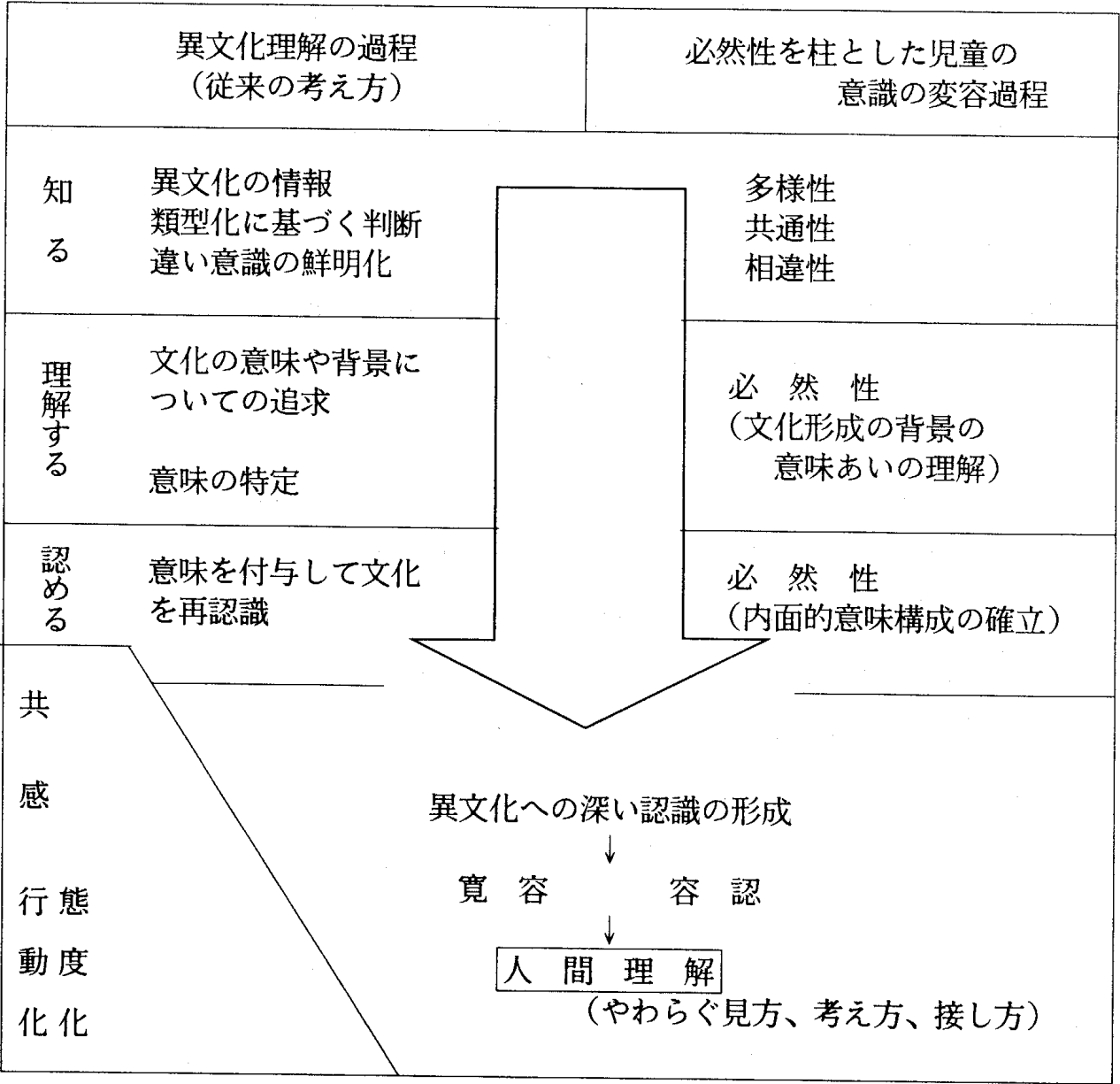
異文化理解とは、人間理解といえる

- ・アジアにみられる歴史的・社会的事象をみつめれば→異文化であり
- ・その文化の中に生きる人間の内面的・心的なものに迫れば→異文化ではない

異文化を必然性の視点で思考すれば、他国の人々の生き方、考え方を理解し、容認できるようになる。



イ. 仮説 2 との関連



③ 児童の意識の変容過程との関連

異文化理解教育は、その第1ステップ「多様性」とした場合、その段階だけでとどまることを許されない。

何故ならば、知的理解で終わってしまい、学習以前から存在するイメージがそのまま残ったり、あるいは、さらに増大する危険性をはらんでいるからである。そのため、次の段階に進まなければならない。

次の段階とは、「共通性」「相違性」「共感」であり、「共感」の域へ達しない限り、国際理解教育の目標である行動化、態度化は成立しないであろう。

そのためにも、異文化理解教育においては、メンタルな部分での変容に重きを置き、その指導過程を模索していく必要があるといえる。

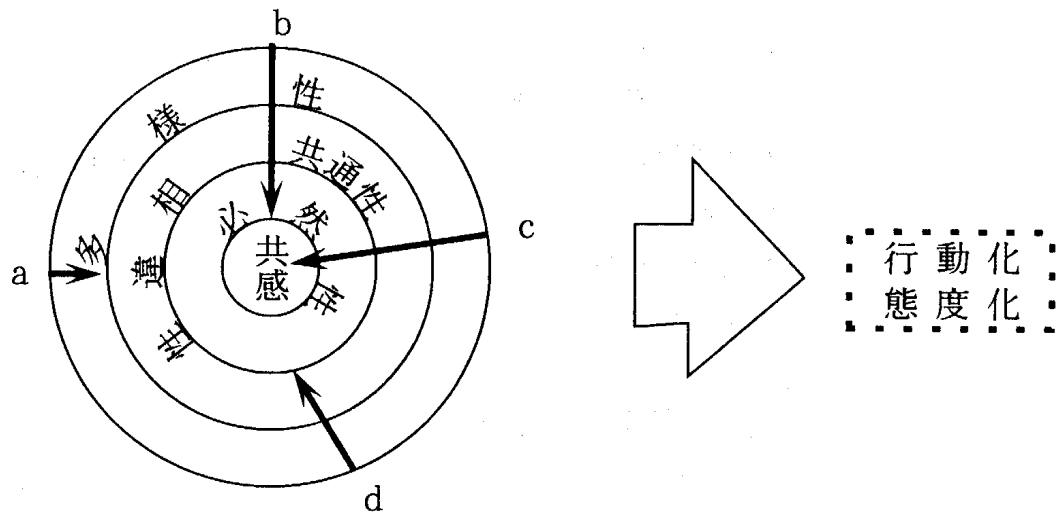
児童の意識をより深化させるためには、学習する文化に対してどれだけ着目させ、思考させるかであるが、本稿では、「必然性」という視点を設定してみることにする。

「必然性」という視点は、内面的意味構成をより確実なものにすると考える。何故ならば、その視点から文化をみつめようとすれば、その国の「人」の立場に立って（の側から）思考しようとするであろう。その際、人が思考の中に登場することによって、その人にとっての「必然性」を見いだそうと努力し、その国の文化の「意味あい」について「人」を介して、文化への寛容・容認を可能ならしめるからである。

以上のことから、異文化理解教育においては、その指導過程の中に「必然性」を組み込まなければならないと考え、仮説の検証を試みることにする。

《児童の意識の変容過程：仮説》

- a 知的理解のみ 既存のイメージ増大の危険性
- b 児童は、さらに深化しようとする
- c 本研究で求めるもの
- d その国についての歴史的・社会的事象の理解



④ 検証授業との関連

- a 日本に醤油が生まれる必然性
- b 東南アジアに醤油が生まれる必然性
- c 世界各国に醤油が受け入れられるわけとその必然性
- d 高床式の家、倉庫である必然性
- e 米を保存する必要性
- f 米を加工、炊いたものを保存する必然性
- g 着用する服の必然性
- h 味覚の必然性

以上の視点で授業を構成し、仮説の検証を試みる。

⑤ 必然性の視点の他との関連

必然性の視点を児童に持たせることにより、様々な分野に深まりを期待できるのでないかと考える。

- a) 必然性の視点で事象をみつめれば、人間にとって本来、不必要と思われる「もの」「こと」「活動」に問題意識を持ち、行動化をはかるのではないか。

(例)

◇ 過度な人間の活動行為が生みだしている

- ・温室効果
- ・大気汚染
- ・オゾン層の破壊
- ・有害廃棄物
- ・酸性雨
- ・地下水の汚染
- ・ゴミ問題

環境教育の必要性

- ・海産資源等の減少
- ・森林伐採
- ・基準値以上の農薬の使用
- ・飽食による供給国への様々な影響

消費者教育の必要性

- ・戦略核
- ・人類殺傷の武器生産

平和教育の必要性

◇ 東南アジアとの関係でみれば

- ・タイ国における日本向け野菜の規格・基準の問題と消費者の購買基準の問題
- ・キャットフードの原料とフィリピン、インドネシア、タイの環境と人々の暮らしとの問題
- ・建築材料と東南アジアの森林伐採の問題

b) 帰国子女との関連

帰国子女は英語が上手→まわりの子 いじめ

「生意気 カッコつけてる」

本人

「英語を話したくない

学校へ行きたくない」

現地での「話す」必要性、必然性についての理解をはからせれば、いじめ発生の芽に対応でき、より良い交友関係の形成に結び付く。

c) 外国人子女との関連

- 外国の人が、日本に働きに来る必要性



日本に来るから、必然性

- 家族がともに暮らす必然性
- 教育を受けさせたい必然性
- 教育を受ける必要性

(4) 魚醤油の教材化

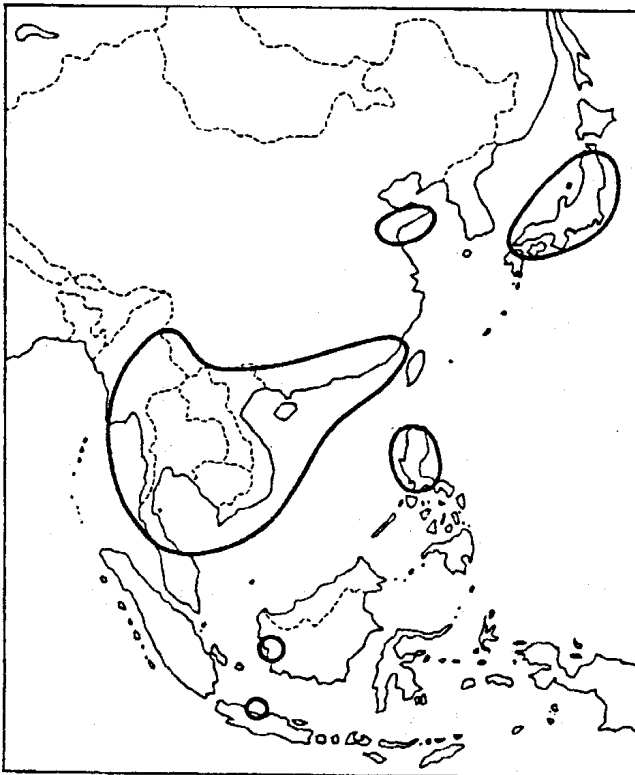
① 文化へのヨコの態度の育成

日本人は、近隣アジア諸国の文化や人々を低くみるきらいがある。今、日本人に必要な条件は、異文化に対するヨコの態度を培うことといえる。

〔欧米文化＝日本文化＝発展途上国文化〕

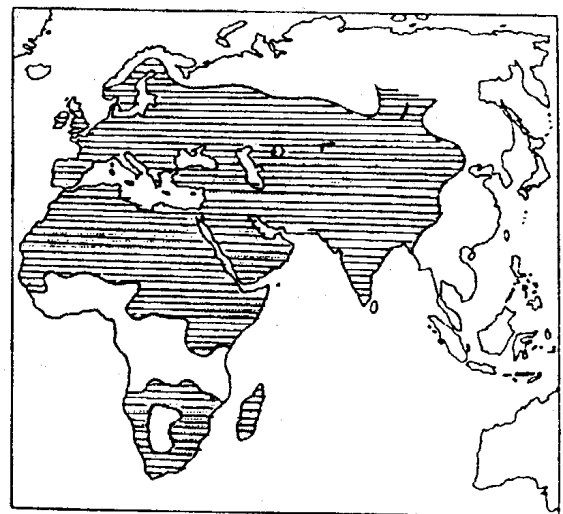
② 魚醤油の分布

魚醤油の担い手となったのは、家畜を持たず、魚に恵まれ、それによって十分な蛋白質を得ることができた民族、しかも、水田耕作を行っていた民族である。



魚醤油の分布圏

乳しぼりをする地域（15世紀における）



※『魚醬とナレズシの研究』（石毛直道、ケネスニラドル著 岩波書店）より

③ うま味の文化圏としての共通性

大豆と魚の違いはあれ、東アジアと東南アジアは、うま味をもつ発酵食品の文化を共有している地域である。文化の伝播という点でのつながりや味覚でのつながりを通し、児童は、東南アジアに心の近づきをみせるであろう。

④ 魚醤油を教材化する上での必然性の内容

自然環境と深く結び付いた衣・食・住について思考させ、「保存の必然性」に気づかせる。

2 実践研究

(1) 検証授業の内容

第6学年の社会科において、単元「アジアの醤油」を特設し、次のような単元計画の下に実施した。学習は、7時間扱いで進めた。

① 教科 社会科（第6学年）

② 単元名 アジアの醤油

③ 授業について

この授業は、次の要素で構成されている。

(1) 6年社会科の学習指導要領より

(2) 国際理解教育（異文化理解）

(3) 必然性の視点でみつめるアジアの食

社会科は、教科の性格上、指導内容に国際理解教育の要素を多く含んでいる。とくに、第6学年では、目標（2）の中に「我が国と関係の深い国の様子や国際社会の中で占めている我が国の役割を理解できるようにし、世界の中の日本人としての自覚を育てる」と述べており、他国理解と世界連帯意識の育成について指導することが明示されている。

また、「内容（3）」においては、その「ア」の中でさらに具体的に「我が国と経済や文化などの面でのつながりが深い国があることを調べて、それらの国の人々の生活の様子などを理解し、他国と協調を

図るためには正しい国際理解が必要であることをかんがえること」と明示されている。そこで、学習過程を、次のように設定した。

ア. 日常生活の中から、アジア各国と共通に食している醤油と米を取り上げ、その広がりをとらえさせる。

イ. 民族料理を食べさせ、東南アジアへのイメージを形成させるための素地とする。

ウ. 気候と食べものの関係について考えさせるために、保存の概念に気づかせ、保存の必然性をとらえさせる。

エ. 保存の概念は、人類共通の願いであり、知恵の発露であることをつかませる。

学習は、7時間扱いで進めた。

男子児童17名・女子児童13名

小 単 元 名	時 配
イメージマップを作ろう	1
知らなかった醤油の秘密	1
醤油の発明	1
アジアを食べよう	1
食べ物を守る	1
暑さと知恵の握手	1
さらに知りたいタイ	1

※目標、学習活動、資料については、結果とあわせて展開部分に明記した。

④ 検証授業は、市原市立辰巳台西小学校にて実施した。

(平成4年11月16日～11月25日)

時	目 標	主 な 活 動	主な資料
1	<ul style="list-style-type: none"> 瞬間的に生まれ、自由に変化するイメージをマップに表現することにより、思考することの楽しさをつかむ 	<ul style="list-style-type: none"> イメージマップをつくる 	イメージマップの見本
2	<ul style="list-style-type: none"> 日常何気なく食している醤油は、日本だけでなく、アジアにも姿をかえて存在しており、その味はUMAMIとして世界各国に受け入れられており、アジア共通の誇りであることをつかむ 	<ul style="list-style-type: none"> 醤油のない生活を考える 醤油の世界への広がりを知り、理由を考える 醤油の種類を知り、アジア各地の醤油の存在をつかむ 	海外工場の写真 外国料理に使われる醤油 日本の醤油 ベトナム・中国・タイの醤油
3	<ul style="list-style-type: none"> 稲作文化圏に共通するものの代表として「醤油」を取り上げ、日本と同じように、アジアの人々も米をおいしく、たくさん食べるために知恵を生かし、「醤油」をつくり出したことをつかむ 	<ul style="list-style-type: none"> ご飯だけを食べ、おいしく、たくさん食べるために必要と思われるものを考える 魚醤油と豆醤油の分布について知り、稲作文化圏との重なりをつかむ 魚醤油の分布地域で栽培されているインディカ米の特徴をつかむ 	分布図（魚醤油・豆醤油・稲作） 米（インディカ米・黒米・赤米）
4	<ul style="list-style-type: none"> おいしく、たくさん食べるだけでなく、大切に育ててきた米を保存する方法の中にも、日本とタイに共通する知恵があることをつかむ 実際に食してみる体験を通して、タイの人々の味覚と知恵に迫る 	<ul style="list-style-type: none"> 調理する 魚醤油を使って野菜炒めを作る 竹筒飯を作る 食べて感想を持つ 	作り方の説明図 ナム・プラー 竹（25cm） もち米 ココナツミルク
5	<ul style="list-style-type: none"> 厳しい自然環境の中にあっても、保存の方法を見だし、食の確保に努める人間の知恵の素晴らしさに気づく 	<ul style="list-style-type: none"> 竹筒飯を食べ、竹を使う理由を考える 日本における「保存」の方法について知る 気温と保存の関係をつかむ 魚醤油も豆醤油も保存の必然性から生まれた食品であることを知る 魚醤油の製法を体験する 	竹筒飯 外国人労働者の和食についての考え 竹の皮 干し魚 煮干し 冷凍食品 月別平均気温のグラフ（市原市・沖縄県・バンコク） 分布図（魚醤油 豆醤油）
6	<ul style="list-style-type: none"> 食の保存の必然性を生み出す大きな要因ともいえる「暑さ」のイメージの具体化をはかり、「暑さ」に対応して生活するタイの人々の知恵に気づく 	<ul style="list-style-type: none"> 高床式住居の絵を見て、わかることを話しあう 家のある所の気候について考えを深める 気候に合わせて工夫していると思われる家のつくりについて話し合う 衣服の様子から暑さに対応する知恵をつかむ トムヤムスープを食し、暑さとの関連を考える 	高床式住居の絵 高床式住居のモデル 男性用の公用服 タイシルクドレス トムヤムスープ
7	<ul style="list-style-type: none"> 物産をつくる人々の視点に立って物産をみつめ、その考え方や工夫を知ることを通して、タイの人々の暮らしと自然の関係について考える 	<ul style="list-style-type: none"> 竹製のボックスをもとに、物産の見方を知る 物産の背景にある知恵について考える マンゴスチンを食し、気候をさらに考える 	ティッシュボックス 物産の数々 マンゴスチン

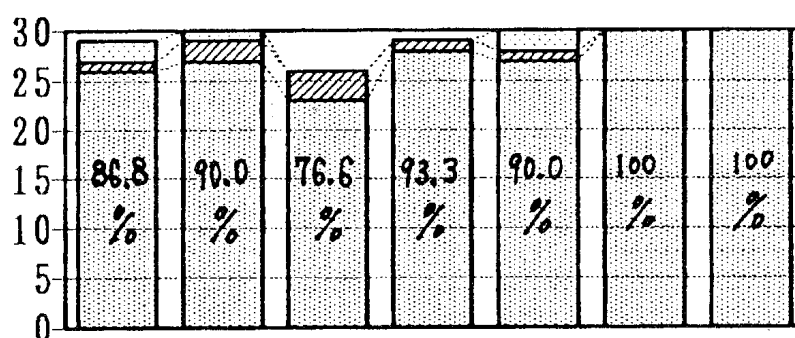
(2) 検証授業における情意スタイル分析

毎回の授業後に、アンケート調査をした。調査内容は、「興味、理解、取り組み」の3点について、「はい、いいえ」で答えたものである。

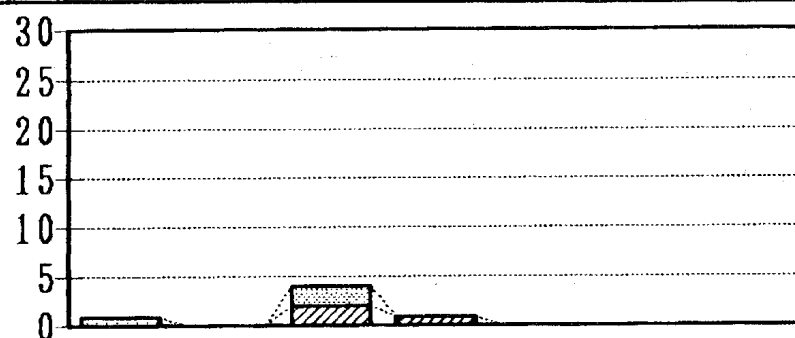
その結果を「情意スタイル分析」（総合教育センター紀要 251）によって分析してみる。

76.6%と第3時の完全型は、減少している。魚醤油と豆醤油についての学習は、難度が高いためである。また、実験におかずがなく、ご飯だけで食べたため、「つまらなかった」との感想による。

（単位：名）



	授業1	2	3	4	5	6	7
完全型	26	27	23	28	27	30	30
軽視型 A	1	2	3	1	1	0	0
努力型 A	2	1	0	0	2	0	0
反発型	0	0	0	0	0	0	0



	授業1	2	3	4	5	6	7
興味型	0	0	0	0	0	0	0
軽視型 B	0	0	2	1	0	0	0
努力型 B	1	0	0	0	0	0	0
放棄型	0	0	2	0	0	0	0

興 味	授業は、おもしろかったですか。(はい いいえ)
理 解	授業の内容についてわかりましたか。(はい いいえ)
取り組み	授業によく取り組みましたか。(はい いいえ)

	感情	認知	行動
完全型	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
軽視型A	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input checked="" type="radio"/>
努力型A	<input type="radio"/>	<input checked="" type="radio"/>	<input type="radio"/>
反発型	<input checked="" type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
興味型	<input type="radio"/>	<input checked="" type="radio"/>	<input checked="" type="radio"/>
軽視型B	<input checked="" type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input checked="" type="radio"/>
努力型B	<input checked="" type="radio"/>	<input checked="" type="radio"/>	<input type="radio"/>
放棄型	<input checked="" type="radio"/>	<input checked="" type="radio"/>	<input checked="" type="radio"/>

○ はい
● いいえ

(3) 検証授業の結果と考察

① 仮説1

タイの食生活に密接にかかわる魚醤油を学習の中心に取り上げる
ことにより、子どもたちは、タイの食生活に対し、関心と共感を持
つであろう。

ア. 検証方法

児童が書いた作文、イメージマップの内容を調べ、魚醤油についての
関心、共感の反応の結果を分析する。

イ. 結 果

a) 作文にあらわれた魚醤油への考え

第2時、第4時、第5時の授業後にみられた児童の反応は、以下の
通りである。

第2時	醤油を使っているのは、日本だけではないようです。アジアにもありました。このことをもとにして、アジアについてどう思いますか。		
	日本と同じ生活をしている 貧しさのイメージの転換 魚醤油の存在への驚き	13名 6 6	負のイメージ 4
第4時	魚醤油の野菜炒めを食べてみてどうでしたか。		
	おいしい 日本と同じ味 さっぱり	14 4 2	負のイメージ 9
第5時	魚醤油をつくってみて、どのようなことを感じましたか。		
	タイの人々の知恵・工夫 タイの人々の苦労 製法への関心 手づくりの素晴らしさ 知的な理解	20 14 2 2 2	負のイメージ 4

第2時に、30名中13名（43％）は、醤油の存在を知り、「日本と同じ」という感想を持ち、文化の共通性に触れている。そして、同じような醤油を使っていることを知り、「貧しさ」の概念を修正しようとする児童が、6名（20％）いる。

第4時では、民俗料理を食べる体験の場を設定した。14名（46％）は、「おいしい」というプラスの素朴な反応を示している。9名（30％）が、「まずい」など負のイメージをもった。この反応は、第5時での文化形成の意味あいを考える際に有効に利用できた。

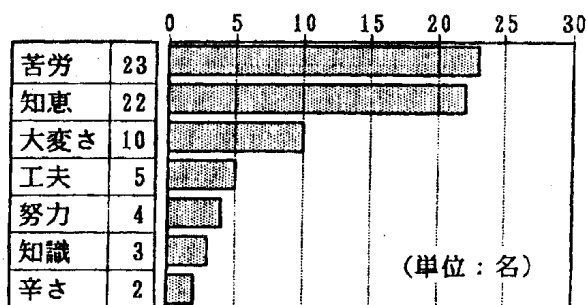
魚醤油を使った野菜炒めのイメージは、有効に生かされている。「まずい」と感じていた魚醤油について、その意味あいをタイの人々の立場から定義づけようとしている。魚醤油の製法を体験することで、26名（86.6％）の児童が、タイの人々の多様な面を理解しようとしているからである。

第5時では、魚醤油それ自体についてではなく、魚醤油を媒介にして、タイの人々の行為について記した内容が多くなっている。これは、関心が単に醤油だけでなく、文化全体へ広まっているといえる。

b) タイの人々の行為から

授業後に、タイの人々の行為を通して感じられることを短い言葉で表現させてみた。

児童は、実際に魚醤油の製法を体験しながらタイの人々の心情に近づこうとしている。魚醤油を作るうえでの「苦勞」を76.6%の児童が、手づくりの「大変さ」を33.3%の児童が挙げている。さらに着目したいのは、73.3%の児童が、タイの人々の知恵を感じ取っていることである。



c) 次の問に対する反応を記してみる。

魚醤油を作ってみて、どのようなことを感じましたか。

- ・ 保存の知恵がわかる。普段からこんな知恵をしぼっているんだな 4名
- ・ 壺の口に塩をつけて、蠅を防いでいる工夫がすごい 4
- ・ つくる人たちの工夫や知恵がすごい 3
- ・ 殺菌作用の塩を使うなんて頭がいい
- ・ 塩をたくさん入れて、腐らないようにするなんてさすがだ
- ・ 塩を使うのは、魚を腐らせないためだろう
- ・ 保存するのに塩を入れるのはすごい知恵 1
- ・ 保存するのに口の狭い壺をつかうのも知恵のひとつ
- ・ タイの昔の人は、いろいろなものの性質を生かしていたんだなあ
- ・ 少しずつ工夫をして、このような魚醤油になったのだろう
- ・ とても苦勞するだろうなあ 7
- ・ 大変さがわかる 4
- ・ よく何時間もかけて作るなあ
- ・ タイの人の苦勞が少しわかった
- ・ 手づかみで塩と魚を何度もいれるなんて大変だなあ
- ・ わたしたちは機械に頼り過ぎている
- ・ 機械を使わず、人の手でやるのは心がこもっている
- ・ 面白い作り方だ

- ・実際にやってみて楽しかった
- ・魚醤油が塩辛く、生臭い訳がわかった
- ・塩には、いろいろな役目があることがわかった
- ・本当にこんなもので出来るのか
- ・何日で作り終わるのか
- ・生だからやりにくい
- ・魚をつかんで、汚いと思わないのか
- ・面倒なことをしている
- ・こんなものを普段から食べているなんて信じられない

1

d) イメージマップに表れた言葉

児童が授業後に書いたイメージマップの中から次のキーワードの出現率を調べた。

テーマ	言葉	事 前		事 後	
		数	出現率(%)	数	出現率(%)
醤油	魚	2	6.6	25	83.3
	魚 醤油	0	0	23	76.6
	塩	6	2.0	18	60.0
	タイ	0	0	14	46.6

児童がそれまでにもっていた醤油のイメージは大豆であったが、魚からも作れるというイメージが高い数値で表れた。

ウ 結果の考察

以上の結果から、魚醤油を通して文化の多様性に視点が広がり、関心が高まったといえる。

このことから、魚醤油を中心とした学習は、タイの人々への共感を引き起こすという仮説は検証された。

② 仮説2

魚醤油が気候や産業と深く関わることを知ることにより、文化の生まれることの必然性に気づき、タイ人の生き方を認めるであろう。

ア 検証方法

各授業展開の中に、「必然性」の視点で思考する場面を設け、児童の作文の中から変容していると思われる内容のものを調べ、結果を分析する。

イ 結果と考察

a) イメージマップ

「南の国」をテーマとして、次のキーワードの出現率を調査した。

テーマ	言葉	事前		事後	
		数	出現率(%)	数	出現率(%)
南の国	暑い	17	56.6	21	70.0
	高床家	0	0	19	63.3
	タイ	1	0.3	18	60.0
	魚	4	13.3	15	50.0

暑さについては、事前の調査においても現われていた。また、ヤシの木をはじめとする自然にふれたものが比較的多い。

これに比べて、事後においては、気候的なものや自然のようすにとどまらず、住居をはじめとして、人々の生活の具体的なようすに関心を示している。

b) 高い気温と保存の関係

・タイは、1年中暑いから物がすぐに腐る	21名
・殺菌作用のある竹を使って腐りにくくする	18
・竹を使うと、年中保存できる	10
・暑いから竹は、1年中はえていて育ちやすい	4
・タイは暑いから竹の成長がはやい	2
・日本は気温が低いので、竹の皮のようないもので保存できる	1

東南アジアの高い気温から暑さを知り、食物との関連から「腐る」ということを想起し、「保存の必然性」に気づき始めている。さらに、魚醤油の背景となる気候への存在にも気がついている。

また、家庭で聞くなどして、竹の殺菌作用を調べた児童もあり、関心の高まりを示している。主な内容を挙げると、

- ・昔は、おにぎりを竹の皮で包んだそうだと。腐らせない働きがあるのかもしれない。
- ・竹を水筒のように使っていたらしい。
- ・タイの竹筒飯のように、竹で蒸すとなんだかわからないけれど、いい働きがあるのだろう。

c) 保存に関する事前・事後テスト

事前に殆どないものが、23名（76 %）と高い出現率である。

また、事後の上2つを合わせると、30名（100 %）が、魚醤油を「保存の必然性」の視点からとらえ、文化形成の意味あいを考えている。

＜東南アジアでは、「魚醤油」をつくりだしました。その理由と思われることを書いて下さい。＞

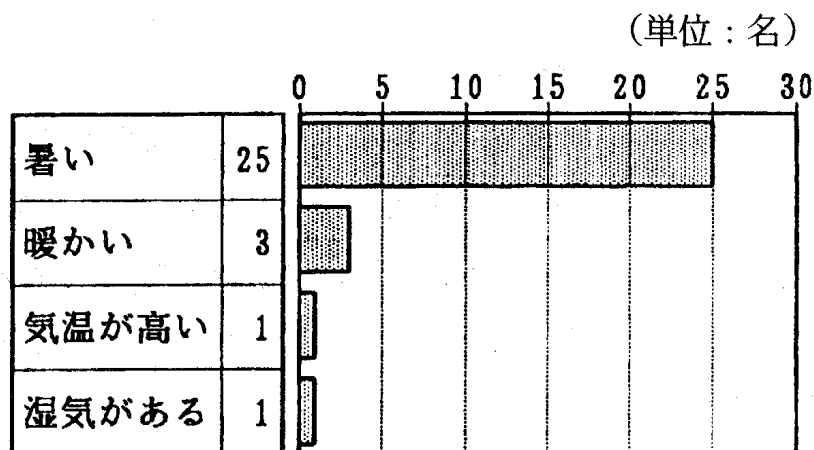
内 容	事 前	事 後
長く保存するために	0 名	23名(76%)
腐りにくくするため	1 (3%)	7 (23%)
暑い国だから、辛い物を食べたい	0	5 (16%)
気候に対応するため	0	4 (13%)
材料がすぐ手に入るから	0	1 (3%)
伝統の食べ物だから	0	1 (3%)
昔の人の知恵	0	0
生きるため	1 (3%)	0
おいしくつくるため	1	0
生活のため	1	0
飢えていたから	1	0
獺に行くときの腐らない弁当として	1	0
作る道具がないので、自然の物を使った	1	0
無 答	24 (80%)	0

（自由記述）

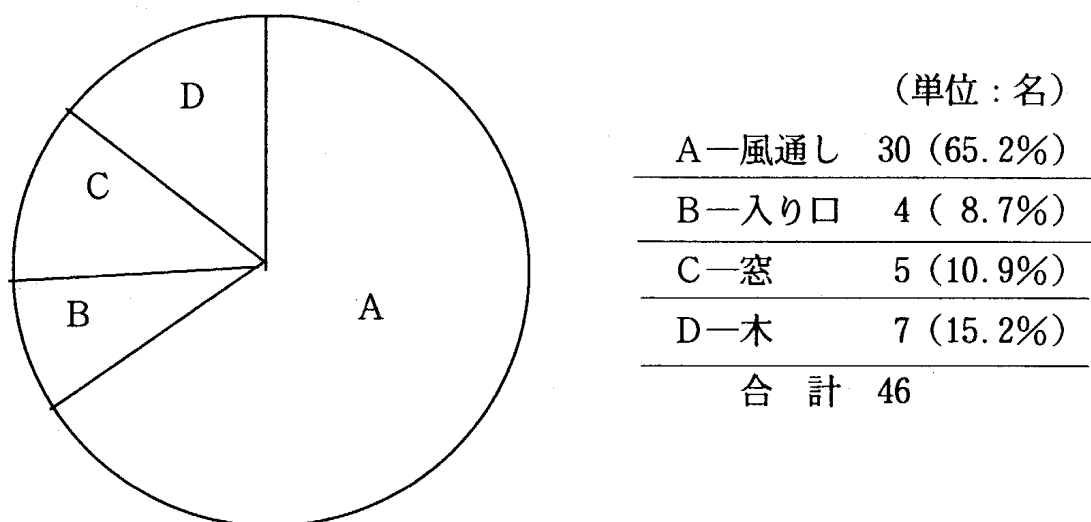
d) 気候と生活（高床式住居）

衣・食・住の面から暑さについてイメージの具体化をはかり、暑さに合わせて生活する必然性への理解をはかった。

＜家のあるところの気候＞



＜気候に合う家の工夫＞



高床式の家を教材として活用した。家のある所の気候については、29名（96.6％）の児童がとらえている。

また、家の工夫と思われることについての調査では、全員が、「風通し」を挙げている。

高床式の家については、暑さに対応したタイの人々の知恵や工夫を認め、家のつくりの「必然性」への理解が深まり、そのつくりの巧みに殆どの児童が驚嘆している。

今日の学習を通して、始めにもっていた考えが変わったなあということはないでしょうか。

・タイの人は、よく工夫して建てている	15名
・知恵をしぼってる	4
・最初は、なさけない家とおもったけど、いろいろ工夫してあり、よく知恵が働くなあと思った	3
・よく考えてつくってある	2
・古くて、ぼろいと思ったけど、案外考えてつくってある	2
・気候に合わせて家を考えて建てるなんて、知恵があると思う	2
・おかしいなと思ったけど、それなりの考え方があるんだな	1
・最初は、へんな家と思ったけど、勉強して最後は、いい家と思った	1
・ぼろい家と思ったが、全部ちゃんとした理由があったのでびっくりした	1
・とても暑さに適している	1
・暑さに強くできている	1

全員が、高床式であることの意味あいを考え、タイの人々の考えを理解している。しかし、導入では、「家」と聞いて、驚いた児童が多かった。

そこで、高床式の家であることの必然性を思考させるために、気候という視点を与え、暑さのイメージの具体化をはかった。暑さに合わせた家であることの事実を目を向けつつ、児童は、気候に対応したタイの人々の知恵や工夫に気がつき、この思考が、魚醤油の生まれる理由を考える際にも役立っていることから、本仮説は検証された。

また、検証された論拠として、第6時で扱った「トムヤムクン・スープ」と「服」をあげてみる。

気候と食文化の関連については、次のような反応がでている。

◇暑い気候なので、辛い物を食べるのかな 12名

辛い味で暑さを忘れようとしている 10名

◇服装については、気候的なことを背景としながら生地の手薄さなどを挙げ、19名(63%)がその必然性を述べている。

以上のことから、児童は必然性に気づいており、仮説は検証された。

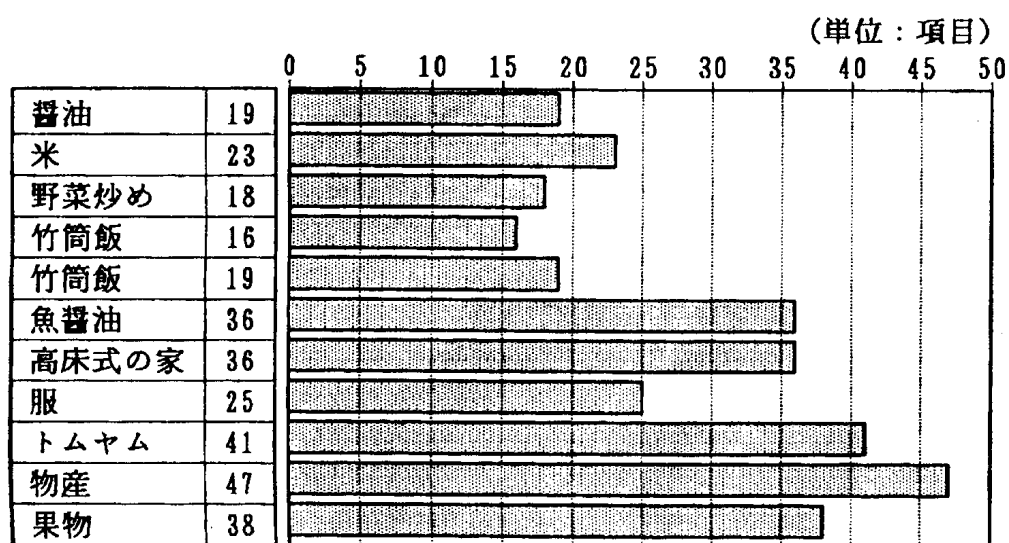
検 証 用 デ ー タ

アジアへのイメージ

第2時から第7時までの展開の中におけるアジアに対してのプラスと思われるイメージの数は、次の通りである。

第2時	醤油を使うアジアを通して	19項目
第3時	米を食べるアジアを通して	23
第4時	魚醤油の野菜炒めを通して	18
第4時	竹筒飯を通して	16
第5時	竹筒飯を通して	19
第5時	魚醤油をつくるタイの人を通して	36
第6時	高床式の家を通して	36
第6時	服を通して	19
第6時	トムヤムクン・スープを通して	41
第7時	タイの物産を通して	47
第7時	果物マンゴスチンを通して	38

アジアのイメージ (正)



本教材は、「保存の必然性」を柱として展開した内容のものである。

特に、第5時から「保存の必然性」の定着を目指し、学習を進めた。第4時における「野菜炒め」と「竹筒飯」という民族料理に対して、児童はあまり良い印象をもたなかった。

敢えて、これを扱ったのには、二つの理由がある。

まず、第一に、アジアに対して無知に近い知識しか持たない児童であるが故に、ありのままのアジアに触れさせ、本音を出させ、第5時以降における学習内容でのアジアに対する判断基準を形成させたかったからである。

第二に、おそらくは、強烈な印象を与えるであろう「竹筒飯」を第4時に設定することにより、第5時での学習において、児童はこの民俗料理に込められたタイの人々の知恵に感嘆し、認め、この段階あたりから感情の移入が始まると考えたからである。

第5時以降においては、数多くの感情移入された児童の声が登場していることがわかる。

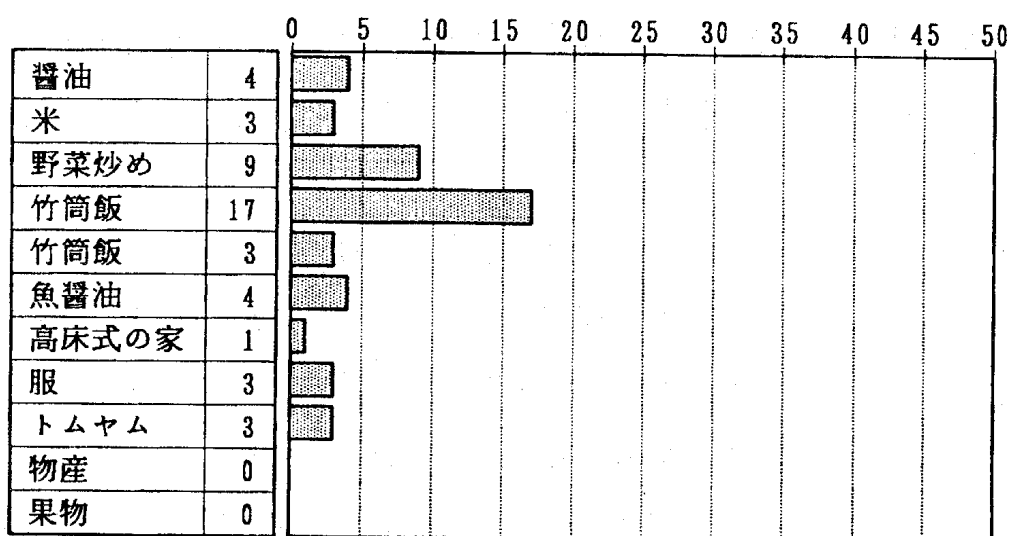
次に、アジアに対するマイナスのイメージを同じ項目でみることにする。

(無答も含むものとする)

第2時	醤油を使うアジアを通して	4項目
第3時	米を食べるアジアを通して	3
第4時	魚醤油の野菜炒めを通して	9
第4時	竹筒飯を通して	17
第5時	竹筒飯を通して	3
第5時	魚醤油をつくるタイの人を通して	4
第6時	高床式の家を通して	1
第6時	服を通して	3
第6時	トムヤムクン・スープを通して	3
第7時	タイの物産を通して	0
第7時	果物マンゴスチンを通して	0

アジアのイメージ (負)

(単位: 項目)

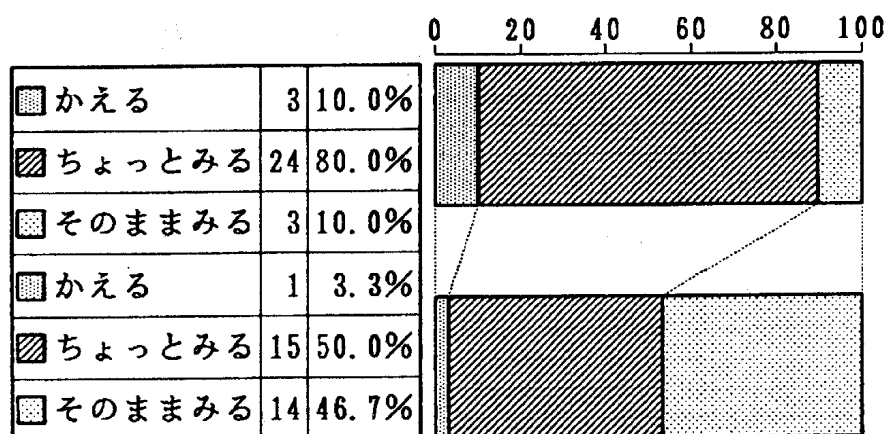


事前・事後の比較

設問1. このごろテレビに外国のことがよく出てきます。そんなとき、あなたは
どうしますか。次の3つの中から1つえらんで下さい。

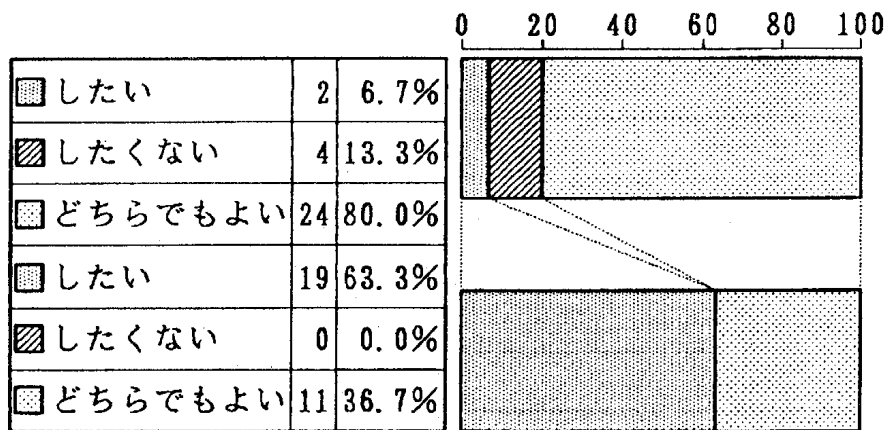
- ① 外国のことに興味がないので、他のチャンネルにかえる。
- ② ちょっとだけそのままにしてみる。
- ③ 外国のことに興味があるので、そのままみる。

《上: 事前 下: 事後》



設問2. あなたは、外国人の生活のようすや習慣を勉強したいですか。次の3つ
の中から1つ選んで下さい。

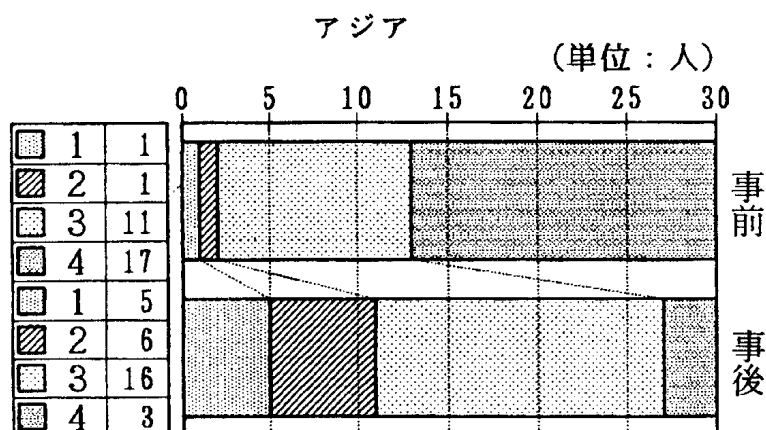
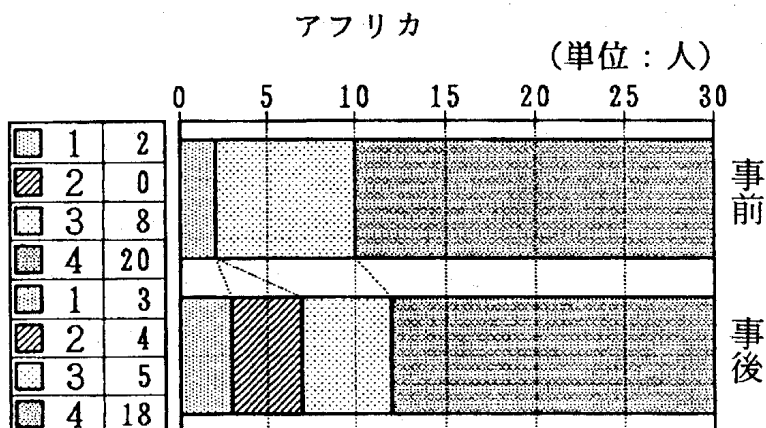
- ① 勉強したい
- ② 勉強したくない
- ③ どちらでもよい



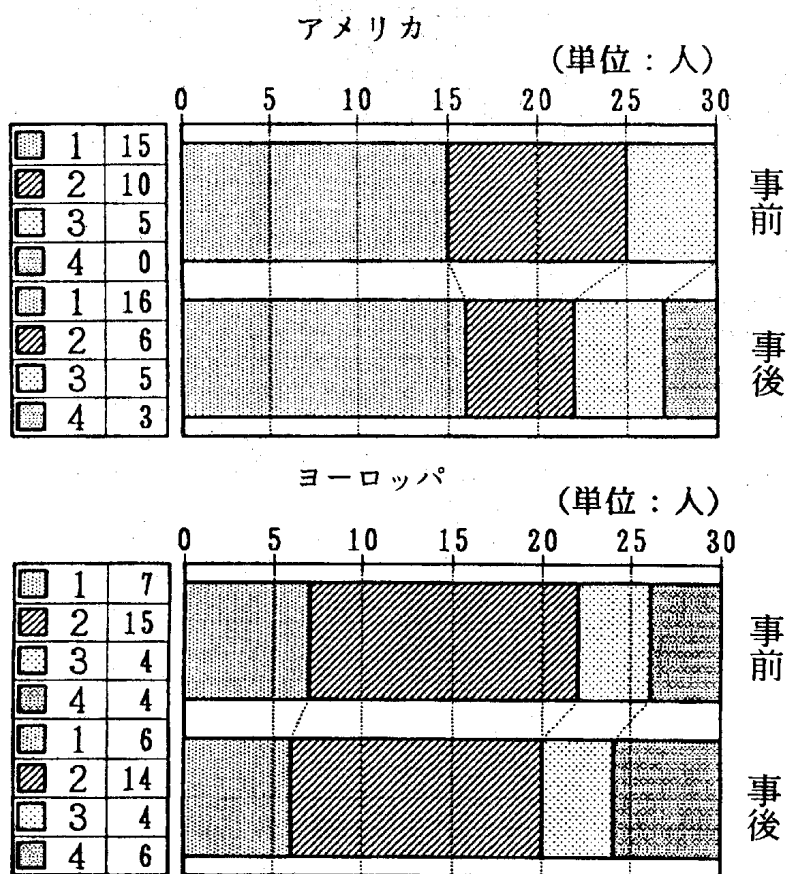
設問1においては、「そのままみる」とする者が、大きな伸びを示し、設問2においては、「勉強したい」と答えた者が増え、「したくない」は、皆無であった。学習意欲の伸長という視点から考えるならば、この数値は、その高まりを示しており、学習内容への関心度が高かったことを意味している。

設問3. 次の4つの中から友だちを選ぶとしたら、どこの人を選びますか。

選ぶ順に番号を書いて下さい。



上：事前 下：事後



欧米を志向していた意識が、事後には、アジア・アフリカに向いていることがわかる。

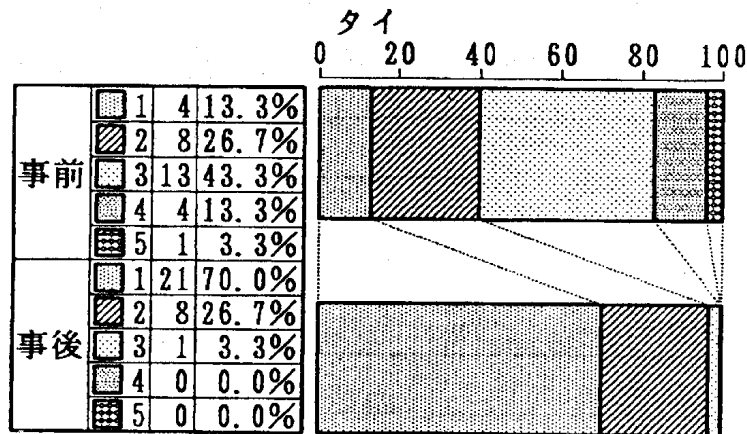
特にアジアについては、4番目に選ぼうとする者が、17名から3名へと大きく減少している。本教材は、アジアの一面についての学習であったが、児童の多様な意識を喚起させるのにも有効に作用したように思われる。

設問4. あなたは、次にあげる国へどのくらい行ってみたいと思いますか。

番号で答えて下さい。

1	とても行きたい
2	わりと行きたい
3	あまり行きたくない
4	ぜんぜん行きたくない
5	その国を知らない

	1		2		3		4		5	
	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後
イギリス	12	14	13	13	4	1	1	2	0	0
ドイツ	12	9	11	14	6	5	1	2	0	0
アメリカ	15	17	7	6	5	6	2	0	1	1
カナダ	17	16	4	9	7	2	2	3	0	0
オーストラリア	21	20	6	7	2	0	1	2	0	0
中国	6	10	8	8	11	7	4	4	1	1
韓国	4	6	7	11	14	8	5	5	0	0
インド	4	7	7	13	15	7	3	3	1	0
フィリピン	5	5	3	10	13	9	7	5	2	1
インドネシア	0	7	8	12	18	8	4	2	0	1
ブラジル	11	14	12	8	5	7	2	0	0	1
ケニア	3	3	6	11	10	9	8	4	3	3
サウジアラビア	6	5	1	9	8	12	11	2	4	2



このデータを見る限り、タイへの関心が大きく高まったといってよい。具体的な物や体験を通して（魚醤油づくり）タイへの親近感を持たせようと試みてみたが、この数値は、本教材が学習成立のための素材として適切であった、という結果を示している。

また、タイの人々への関心もそこに作用していたがゆえに、これほどの高い数値になったのではないだろうか。

設問5. 「アジア」という言葉から、どんなことを感じますか。

《事前》

・子供がよく働く	2名
・お金がない	1
・かわいそう	4
・食糧がない	2
・黒人がすんでいる	2
・おかしい名前	1
・貧しい	10
・ユニセフ	1
・髪の毛が黒い人が多い	1
・日本のまわりの国	1
・大きい国	1
・仲間	1
・暑い	1
・無答	2

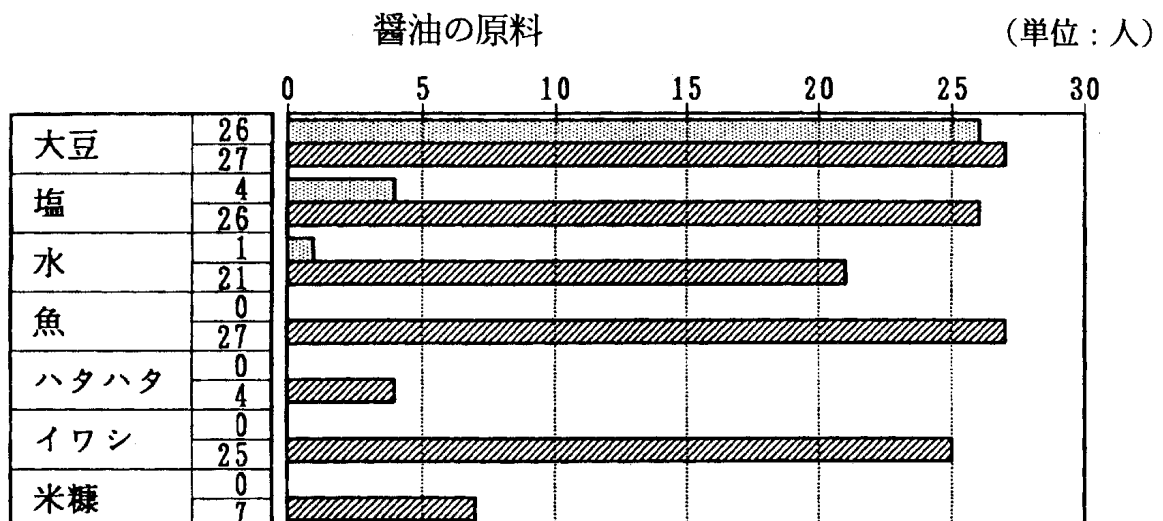
《事後》

・暑いところ	4
・国の中に貧しい人と金持ちがいる	2
・米を食べている国	2
・貧しい	6
・雨がはげしく降る	1
・高床式の家	1
・国が広い	1
・自然が多い	1
・日本と似た暮らし	5
・募 金	1
・魚醤油づくり盛ん	1
・たくさんの国	1
・日本と同じ仲間のすむ所	1
・日本と違う特色がある	1
・そんなに貧しい暮らしをしていない国	1

事前調査では、「貧しさ」を30%以上の者が挙げていたが、事後では、20%に下がり、付け加えて、人々の暮らしぶりに触れた言葉をイメージのあらわれとして回答している。また、負のイメージから正のイメージへ転換を図ろうとしている言葉も表出している。

設問6. 醤油の原料は、何ですか。

事前と事後の正答率の比較を試みしてみる。《上：事前 下：事後》



それまでに考えもしなかった醤油の原料に接しながら、おそらくは、児童の今までもっていた既存の知識を自らが打ち砕き、その砕いた分だけ、今回の学習内容に関心を示し、興味・関心を醤油に傾注していったのではないかと思われる。

設問7. ごはんを保存する方法には、どんな方法がありますか。

	事前	事後	
竹筒を使う	0	18	60%
竹の皮で包む	0	23	76
塩を使う	0	16	53
干す	1	5	16
冷凍する	6	13	43
ジャーに入れる	2	8	26
冷蔵庫に入れる	15	23	76
真空パック	0	6	20

設問8. 食べ物を保存するには、どんな方法がありますか。

	事前	事後
竹筒を使う	0	21
竹の皮で包む	0	22
塩を使う	0	17
干す・乾燥	0	22
冷凍する	16	17
地下にしまう	3	4
冷凍庫に入れる	21	22
真空パック	0	8
缶詰	0	7
ラップで包む	7	9

設問7, 8は「保存の必然性」とその方法をどの程度までつかんだか、ということ进行调查するための設問である。自由記述の作文法により調べた。

学習を進める中で、自分たちの生活に、「保存の知恵」を再発見したようである。この学習を機会として、今後、人間の様々な知恵をみつめていこうとす

る児童に育つのではないかと思われる。

設問9. 次のところでは、どんな米を食べますか。

事前調査では次に挙げる種類は、出現せず、無答がそれぞれ日本15名、東南アジア22名、アメリカ22名であった。

日 本	ジャポニカ種	26名	86%
東南アジア	インディカ種	22	73%
	黒米	18	60%
	赤米	16	53%
アメリカ	ワイルド・ライス	21	70%
	カリフォルニア米	8	26%

知的な理解度を調べるための設問である。名称については、記述式をとった。

設問10. 何の名前でしよう。

ヌク・マム	ナム・プラー
タク・トレイ	ンガピャーエー
ナム・パ	パティス

《事前》 0%

《事後》 「魚醤油」と正答を記入した児童は、26名（86%）。

同じ魚醤油でも、さまざまな味覚と名称があることを知ったようである。国際理解教育の目当てのひとつである「多様性」を知るには、魚醤油は、教材として非常に有効である。また、名称の響きは、児童にとって面白いものであり、導入時にこの名称を読ませ、言わせてみるだけでも、関心をひき、興味づけできるということがわかった。

設問11. タイの人の良いところだと思うことを書いて下さい。

《事前》

《事後》

・やさしそう	11名	・すごい知恵がある	12
・ひどい言葉を使わない	1	・遅い	1
・いても笑っている	1	・自然を生かしていろいろな物を作っている	1
・よく働く	3	・暑さに合った暮らしをしている	2

・頭がいい	1	・暑いので、食べ物を保存しているよ	7
・ムエタイが上手	1	・うに家を考えて造っている	10
・明るい	1	・洪水や湿気を防ぐ家の工夫	5
・偉い	1	・暑さに対応し、涼しい服を生み出した	1
・仲が良い	4	・何もかも工夫がすごい	1
・親切	1	・無駄がない	1
・差別をしない	2	・いろいろな物を大切に使っている	1
・うそを言わない	1	・苦勞してでも、いろいろな物をつくる	1
・協力的	1	・伝統を守り続けている	1
・おしゃれ	1	・暑さをしのぐ工夫をしている	1
		・気候に合った物を作る	2

事後の回答文をみてわかるように、漠然としたタイ人に対するイメージではなく、学習内容をもとにして、タイ人をより深く、より身近に意識し、とらえようとしていることがわかる。

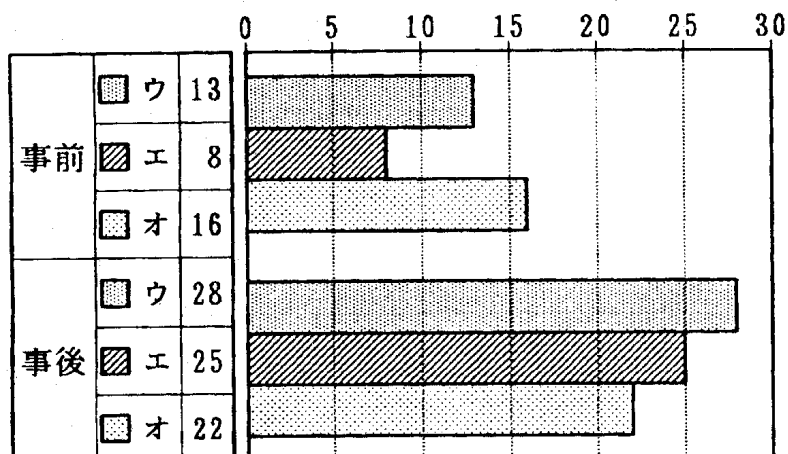
その中でも、とりわけ、「知恵」や「工夫」という視点から好ましいイメージをつくり上げ、感心さえも示している様子がうかがえる。

設問12. タイの気候だと思うものを選んで、○をつけて下さい。

- ア. 四季（春夏秋冬）がはっきりしていて、おだやかな気候。（ ）
 イ. 雪や氷におおわれ、夏だけ緑がみられる。（ ）
 ウ. 1年中暑く、湿気が多い。（○）
 エ. 雨期と乾期に分かれている。（○）
 オ. 1年中暑く、雨は降っても2～3時間だけである。（○）

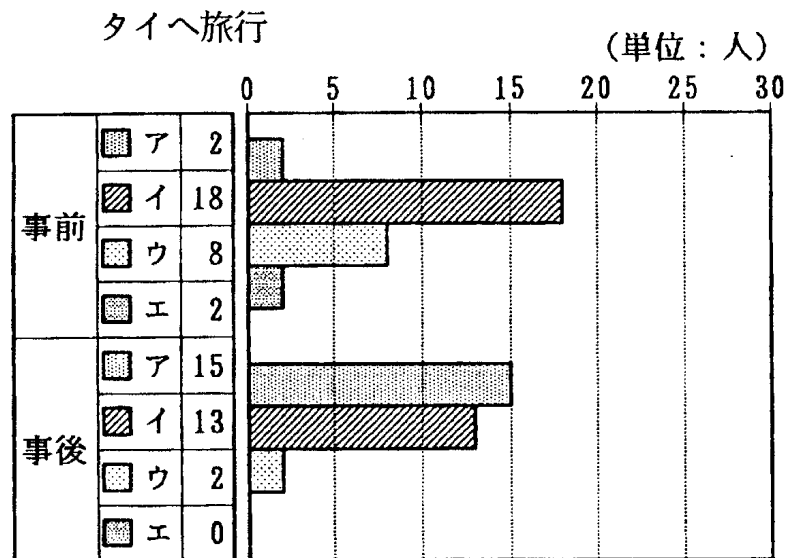
タイの気候正答率

（単位：人）



設問13. タイという国へ旅行してみたいですか。

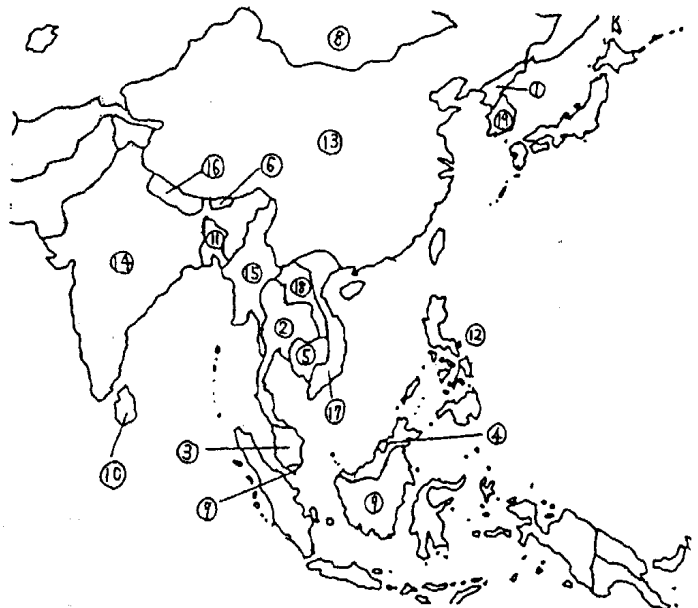
- ア. とても行きたい
- イ. 少し行きたい
- ウ. あまり行きたくない
- エ. ぜんぜん行きたくない



「ぜんぜん行きたくない」という回答がなくなっている。「とても行きたい」と「少し行きたい」を合わせると、28名となる。特に、前者は、2名から15名へと増え、タイへの興味・関心が大きく高まっていることがわかる。

設問14. タイは、何番でしょう。

事前テストでの 正 答 率	1 名 (3.3%)
事前テストでの 正 答 率	2 5 名 (83.3%)



小学校6年生段階で、東南アジア諸国の位置を正確にいい当てられる児童は、少ないであろう。学習の中での地図の活用と緯度の違いによる暑さの違いを意識的に進めてきた結果が、このような高い数値になったと思われる。

設問15. 東南アジアでは、「魚醤油」をつくりだしました。その理由と思われることを書いて下さい。

《事 前》

- ・食物を腐らせないように 1名
(長持ちさせるため)
- ・生きるため 1
- ・おいしく作るため 1
- ・生活のため 1
- ・飢えていたから 1
- ・作る道具がないので、自然の物を使ったから 1
- ・猫に行くときの腐らない弁当とし 1
- ・無 答 24

《事 後》

- ・腐りにくくするため 7名
- ・長く保存するため 23
- ・気候に対応するため 4
- ・伝統の食べ物だから 1
- ・暑い国だから、辛い物を食べたので 1
- ・昔の人の知恵 1
- ・材料がすぐに手に入るから 2

「保存の必然性」をどれだけの児童が、学習を進める中で常に思考していたかを知るための設問である。

事後の上位3つがその裏付けとなるが、殆んどの児童が、学習のベースに「保存」の概念をもち続け得たということがわかる。

魚醤油づくりを授業に取り入れたが、体験学習をもりこむと、とにかく楽しさばかりが残り、学習の観点がうすれ、課題意識を形成できない場合がある。

このような意味から、児童は、学習を進める段階ごとに、自分なりの課題をもち、意欲的に取り組んでいたといえよう。

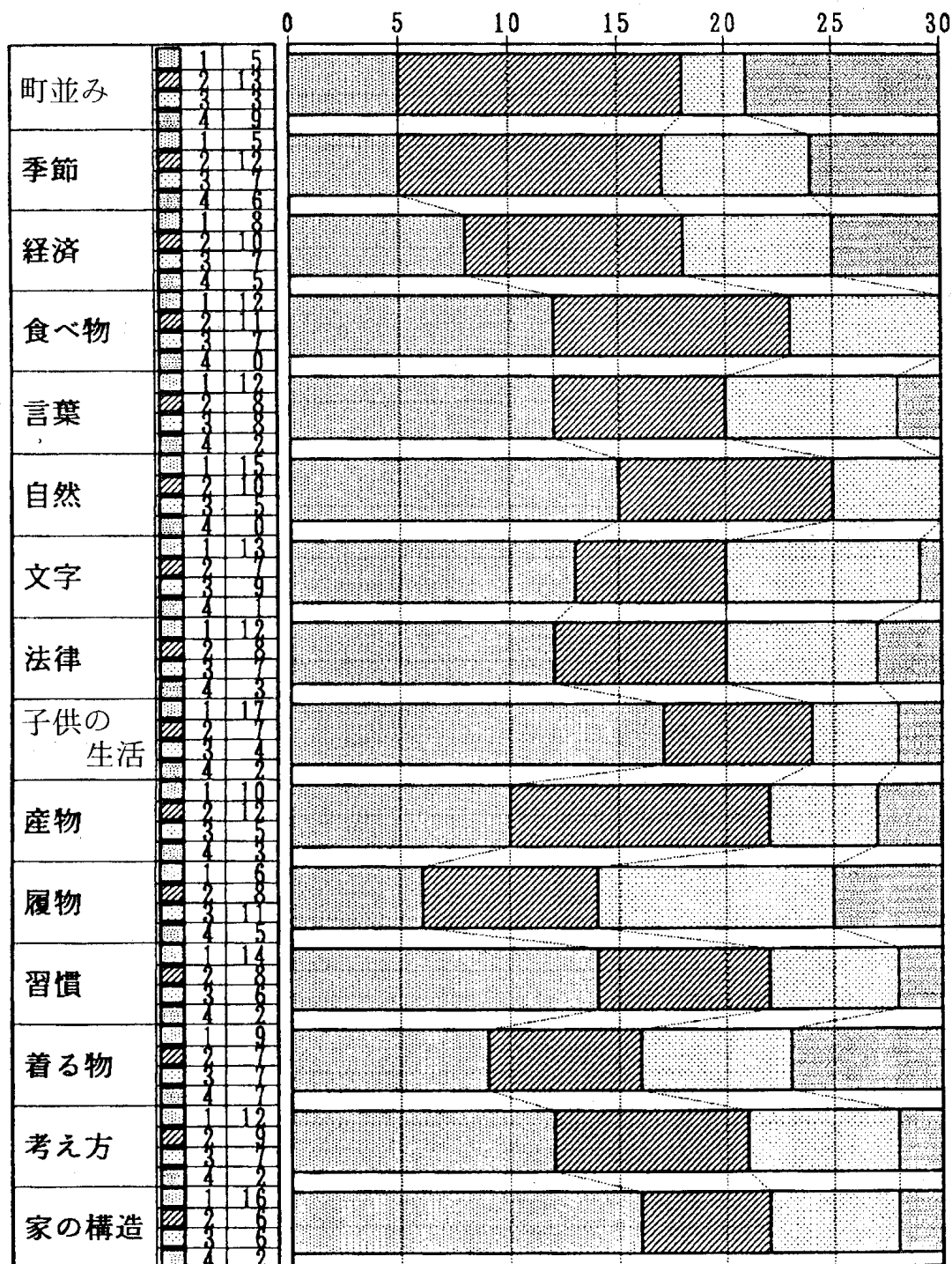
設問16. 東南アジアの次のことについて、どのくらい知りたいですか。

1	とても知りたい	2	少し知りたい	3	あまり知りたくない	4	知りたくない
---	---------	---	--------	---	-----------	---	--------

事前

東南アジアへの関心度

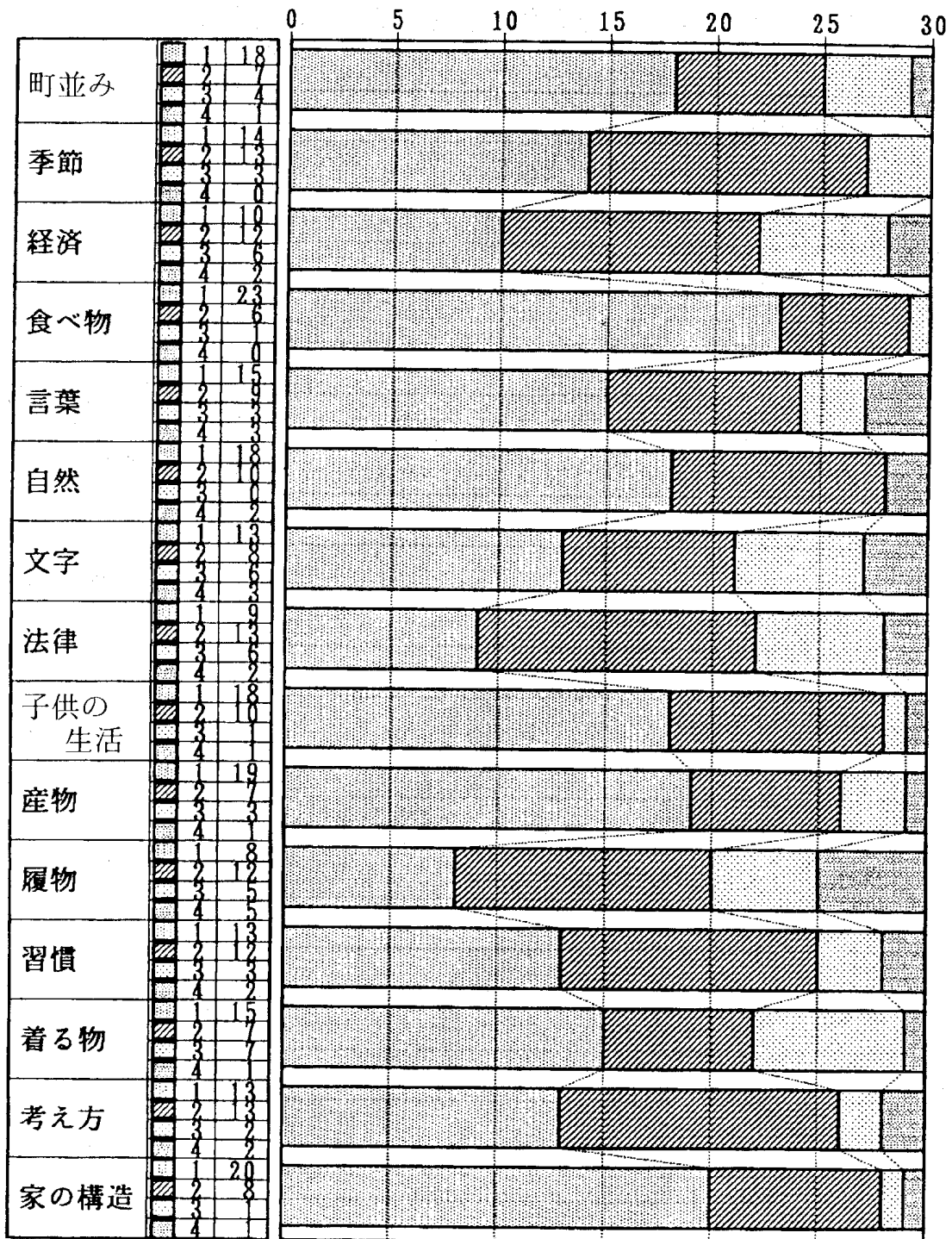
(単位：人)



事後

東南アジアへの関心度

(単位：人)



事前調査においては、「子どもの生活」「自然」「家の構造」「習慣」に関心を示していることがわかった。

これをもとに、今回の学習内容を決定し、魚醤油を事例として、食文化を核として、上記の項目を組み入れながら学習を進めてきた。

この結果、次の項目が関心の度合を高くしている。

- ・食べ物
- ・家の構造
- ・産物
- ・子どもの生活
- ・自然
- ・町並み

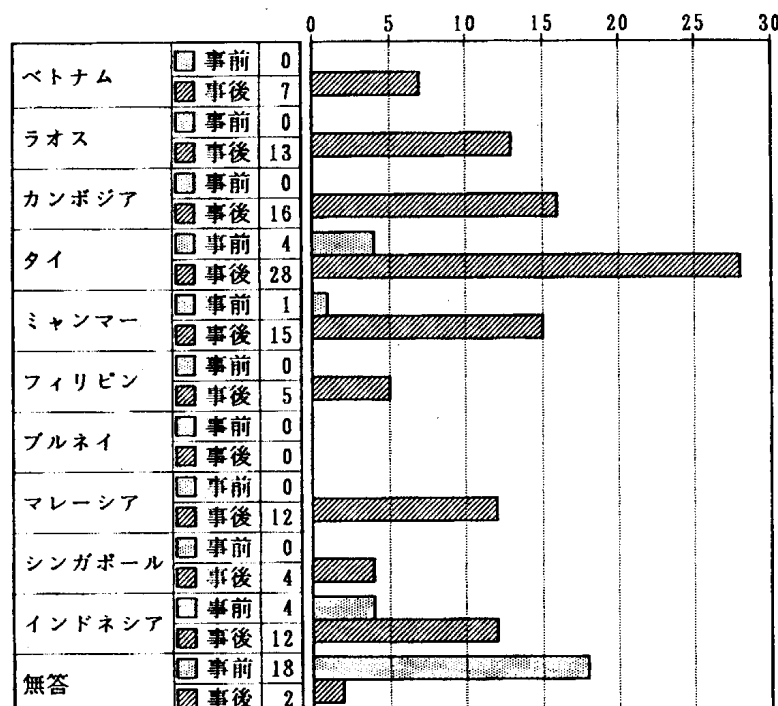
「食」と「住」に関するものに対して、この発達段階の子ども（小学校6年生）は、関心が高く、学習内容としても、意欲の持続」を図るためにも有効であることがわかる。

何故、「衣」にあまり関心を示さないのかについては、今後の研究課題としたい。

設問17. 東南アジアの国の名前を書いて下さい。

東南アジアの国名の正答人数

(単位：人)



設問14のコメントと同じ。

VI 研究のまとめ

1. 研究の成果

- (1) 衣・食・住を関連させながら進める学習は、文化形成の背景をより明らかにとらえることを可能とし、文化形成の意義を理解しやすくするということが検証された。
- (2) 「必然性」という視点をもたせて異文化をみつめさせる学習方法は、その国の側に立って物事を考えさせ、心情的なことまでも理解しようとすることを可能にした。共感への感情移入が始まるのである。「必然性」の視点は、より確実に、児童を共感へと結び付ける大きな役割を担うのではないかと考える。

また、この視点は、児童のメンタルな部分に大きく関与し、文化に対する関心の深化をもたらす手段と考える。

- (3) 文化を学習するにあたって、より確実な効果をもたらす方法としては、体験と資料があげられる。

児童にとって五感で感じとった体験はそのまま事実となり、その上、心まで揺さぶるという効果をもっている。文化とその中に生きる人々に対するより正しい認識を形成させるためには、体験学習は不可欠なものといえる。

また、資料は、提示の仕方が問題であり、児童の意識の変容の段階をとらえなければ、効果は期待できず、意味をなさなくなる。そのために、変容の段階をとらえるためのデータのとり方やそのタイミングが重要といえる。

この2点は、検証授業に取り組んでみて、特に感じたことである。

2. 今後の課題

- (1) 異文化についての知識・理解は、共感のための必要条件ではあるが、それだけでは十分ではない。異文化＝他者を本当に理解するためには、知識・理解に加えて、メンタルな部分が重要といえる。それ故、この部分の変容をとらえるための方法の究明を今後の中心的な課題としたい。
- (2) 世界の人々や国々についての児童の意識や関心には、偏りがある。その中でも、アジアへの関心は低く、また、アジアについて暗いイメージを持って

いる児童が多い。

異文化の学習では、特定の国に固執する必要はないが、日ごろ関心外にある地域や国にも目を向けさせ、新しい視点でとらえさせたり、理解を深めさせたりすることで、負のイメージを転換する機会になると考える。

VII おわりに

平成4年度千葉県長期研修生として、菊地昌典学長先生より1年間にわたり、終始、あたたかな御指導を賜わり、本研究を進めることができた。執筆にあたり、山本健先生（千葉敬愛短大・国際教養科）の御指導を受けた。また、論文執筆の機会を提供して下さった千葉敬愛短大・国際教養科に謝意を表わす。

《主な参考文献・資料》

- | | | |
|-------------------|-------------|----------------|
| 日欧対照イメージ辞典 | 宮田 登 | 北星堂書店（1990） |
| 日本文化論 | 芳賀 登 | 教育出版センター（1991） |
| 現代アジア移民 | 重松 伸司 | 名古屋大学出版（1986） |
| 日本文化のエトス | 芝垣 哲夫 | 創元社（1989） |
| 異文化へのストラテジー | 高橋 順一 | 川島書店（1991） |
| 異文化コミュニケーションキーワード | 吉田 暁 | 有斐閣双書（1991） |
| 国際理解教育 | 永井 滋郎 | 第一学習社（1989） |
| 国際的資質とその形成 | 中西 晃 | 多賀出版（1991） |
| 人間は何を食べてきたか | アジア・太平洋編 | 日本放送出版協会（1990） |
| 魚醤とナレズシの研究 | 石毛 直道 | |
| | ケネス・ラドル | 岩波書店（1990） |
| お醤油の来た道 | 嵐山光三郎 | 徳間書店（1990） |
| 味の文化史 | 大塚 滋 | 朝日新聞社（1990） |
| 食の未来 | 芝崎希美夫 | 日本経済新聞社（1989） |
| 食文化と地域社会 | 地方シンクタンク協議会 | （1990） |
| 湿気の日本文化 | 神崎 宣武 | 日本経済新聞社（1992） |
| マッサージ・ガール | パスク・ボンパイチット | （1990） |
| | 田中 紀子訳 | 同文館 |
| 私たちが見た裸の日本 | 大森 和夫 | 朝日ソノラマ（1989） |
| 発展途上国の環境問題 | 土井 隆雄 | 環境学研究 |

- | | | |
|-------------------------|-----------------|-----------------|
| | | フォーラム (1987) |
| タイ農業が警告する | 長谷川善彦 | 農文協 (1992) |
| タイ娼館 イサーンの女たち | 富岡 悠時 | 現代書館 (1991) |
| バンコクの好奇心 | 前川 健一 | めこん (1990) |
| 豊かなアジア 貧しい日本 | 中村 尚司 | 学陽書房 (1989) |
| 国際化時代の人づきあい | 経済企画庁国民生活局 | (1988) |
| 生活定点 | 博報堂生活総合研究所 | (1990) |
| 明日の隣人外国人労働者 | 花見 忠 | 東洋経済新報社 (1989) |
| 教育の国際化に関する日米意識調査 | 公文研究会 | (1990) |
| 国際理解教育に関する研究(1) | 千葉市教育センター | (1992) |
| 日本人はアジア人か | クントン・インタラタイ | 学生社 (1986) |
| 日本人の国際化 | 澤田 昭夫 | 日本経済新聞社 (1990) |
| 世界の教科書は日本をどう教えているか | 別枝 篤彦 | 白水社 (1992) |
| 開発途上国を考える | 青山 利勝 | 勁草書房 (1991) |
| 日本人の正義感 | | 世界文化社 (1992) |
| モノ誕生いまの生活 | | 水牛くらぶ (1990) |
| 食文化と産業の近未来を探る | | 日本食糧新聞社 (1987) |
| 食の科学1992・8 VOL174 | | 光琳 (1992) |
| 視点・イメージが生きる授業 | 新潟大学教育学部附属長岡小学校 | |
| | | 明治図書 (1992) |
| 体験的国際交流論 | アグネス・チャン | 日本放送出版協会 (1989) |
| 異文化適応講座 | 近藤 裕 | TBSブリタニカ (1989) |
| 教材発掘フィールドワーク | 佐久間勝彦 | 日本書籍 (1989) |
| 社会認識を育てる授業の創造 | 長谷川 正 | 東洋館出版社 (1990) |
| 伝統と文化に学ぶ社会科学習 | 佐島 群巳 | 東洋館出版社 (1989) |
| 国際理解を目ざす学習と方法 | 佐島 群巳 | 教育出版 (1986) |
| 国際理解楽しい授業のヒント | 中野 重人 | 明治図書 (1990) |
| 教室からの国際理解 | 島 久代 | 中教出版 (1990) |
| 国際理解教育の授業 | 古銭良一郎 | 東洋館出版社 (1989) |
| アジアの人々を知る本 | 文 京珠 | 大月書店 (1992) |
| アジアの人々を知る本 | 永山 利加 | 大月書店 (1992) |
| 国際理解教育の推進に関する研究 VOL 293 | 千葉県総合教育センター | (1989) |

How to Develop School Children's International Understanding

Yukio Omoteya

The majority of school children in Japan have the image that South East Asian countries are Poor. Why do they hold such a negative image about them and where this image come from?

These children seem to have developed this image by judging from the life of people in other countries - that is, from food, clothing and shelter.

This paper reports on an attempt to use 'fish-soy sauce' in South East Asian countries as a teaching material to change Japanese school children's negative image into a good one, or at the very least be a first step in changing these fixed images. Why has the writer employed 'fish-soy sauce' as a teaching material? One reason is that 'fish-soy sauce' is the same seasoning as 'Shottsuru' found in Akita and 'Ishiri' in Noto, Ishikawa Prefecture, Japan. The writer wanted Japanese school children to notice that South East Asians use the same kind of seasoning as Japanese, that they developed some of the same kinds of foods as their ancestors did, with the hope that this knowledge would arouse sympathy from Japanese school children with Thai people. Next, the writer introduces the school children to a view point of 'necessity' in order to deepen their sympathy through a process of intercultural understanding. To let the school children themselves notice this 'necessity,' the writer further adds the view points of natural environment, clothing and shelter.

As a result of this guidance the school children paid closer attention to the heat of East Asian countries, noticed the 'necessity' of preserving food, became interested in the food culture of Thailand and took a strong interest in the Thai way of life and thinking. They came to consider things from the Thai People's standpoint and rid themselves of their fixed negative images.